



日本水墨画の
あけぼの
高山寺旧蔵
白描観音図稿本

白衣観音図(左)
楊柳観音図(右)

古代から中世への大きな転換を迎えて、鎌倉時代の人々は、新しい芸術を求めた。その一つが、中国宋時代的水墨画であります。春季特別展「観音の絵画—その美と歴史」で公開される、京都梅尾の高山寺に古くから伝来した二つの白描の観音図稿本は、この勃興期の生新な息吹きを伝える貴重な水墨画であります。

楊柳観音図(右)、蓮華を手にもつ白衣観音図(左)はともに、三枚の紙を継ぎ合せた上に描かれ、紙継ぎのところに、「高山寺」の朱文長方印が捺されています。この観音は、速写風の簡潔で力強い線描で描かれ、生き生きとしたお顔、激しく風に動く衣の裾の表現など、新しい魅力にみちています。古代以来連綿として伝えられてきた輪郭的な白描画の域から宋朝様式の筆勢本位的水墨画へ移ろうとしている作品であります。

紙継ぎの糊が、まだ十分に乾かないうちに描いたのでしょうか、所々に墨のにじみが見られます。彼の地から請来した図像を目の前にし、新しい画風と禅宗的な珍しい画題に接したこの画家は、たかなる心を抑えきれずに筆をとったと想像されます。

高山寺を興した明恵上人は、東大寺を中心とする華嚴宗を復興した高僧で、彼の信仰には、多分に禅宗的要素がみられます。華嚴宗

の他に禅宗なども兼修したこの高山寺には、新しく請来された宋風芸術の動向を示唆する貴重な遺品が豊富に伝っています。例えば、画僧の恵日房成忍の描いた「明恵上人樹上坐禅像」、朝鮮の華嚴宗の祖師の伝記を描いた「華嚴縁起絵巻」には、筆致の奔放さと抑揚自在な作風が認められます。また、鳥羽僧正の筆と伝えられる「鳥獣戯画」や玄証の書き集めた図像類のような墨絵の素描風な作品もあります。このようにみると、高山寺は、まさに鎌倉時代を通じて水墨画の勃興の先駆的な役割をはたしたところといえましょう。本図は、十三世紀前半に描かれたものですが、日本における水墨画のあけぼのを象徴する作品といっても過言ではありません。

この二つの観音図は、昭和十四年、ベルリンで開催された「日本古美術展覧会」に出陳されたもので、それ以来久しく公開されなかった作品です。また同類の稿本がアメリカへ渡ってしまったこととなっては、日本に残った数少ない遺品であります。そして、楊柳観音図の方は、古くは有名な古美術蒐集家であった原三溪氏の愛蔵品であり、それ以前、明治のはじめ頃、本図が高山寺に所蔵されていたときに、臨模されたと思われる富岡鉄斎の写しが現存しているのも興味深いことです。

季刊 美のたより No.27

昭和49年 3月10日

発行 大和文華館